

# St. Luke's International University Repository

The practical use of periodical health check in colleges for promotion of health behavior: The effects of the health consultation by nurses

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 智子, Sasaki, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00014805">https://doi.org/10.34414/00014805</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 大学生を対象とした健康行動を促すための定期健康診断の活用 —看護職による面接の効果—

佐々木 智子<sup>1)</sup>、片平 敬子<sup>2)</sup>、中山 久子<sup>3)</sup>、尾花 智子<sup>4)</sup>、  
神田 典子<sup>4)</sup>、林田 陽子<sup>5)</sup>、紀野 久美子<sup>6)</sup>、滝口 香奈子<sup>6)</sup>、  
鈴木 貴美<sup>6)</sup>、上柳 智津<sup>7)</sup>、赤石沢 京子<sup>8)</sup>、深谷 いづみ<sup>9)</sup>

## 要 旨

本研究は、大学で行われている定期健康診断について、学生が健康診断をどのように捉えているのか、その捉え方の背景は何か、の2点について、保健婦が健康診断を健康教育の場として位置づけて活動している大学と、業務委託で健康診断を実施している大学とで比較することを通して、保健婦による保健面接の効果を検討する事を目的とした。

調査は、協力を得られた4大学の1年生2,466名を対象として自記式調査票を用いて行い、回収率は62.9%だった。

健康診断の捉え方としては、7割弱の学生が自分の健康のために健康診断を受けると考えており、決められたことなので仕方なく、という、半強制的な感覚をもっている学生は2割に満たなかった。また、健康診断を受けたことを7割以上の学生が良かったと答えており、好意的に捉えられていた。

好意的に捉えられた背景要因については、個別の保健指導を行っている大学で健康診断が好意的に捉えられていたことから、健康診断において保健婦が日常生活を視野に入れた保健面接をすることによって、健康診断の印象が良くなることが予測された。また、健康診断に対して良い印象を持たせるためには、健康のチェックができ、検査だけでなく日常生活の見直しができ、時間がかかりすぎないものであることが挙げられた。さらに、所見の有無に関わらず、健康診断の結果が本人に返却されることも健康診断の印象を良くすることにつながると予測された。それにより、保健婦が健診結果に基づいた個別の保健指導を行うことが可能となり、より日常生活へのアプローチが容易になると考えられた。

### キーワード

健康教育 学校保健 保健指導 健康診断 健康行動

## I. はじめに

大学生に対する保健管理は、学校教育法および学校保健法によって「健康の保持増進と学校教育の円滑な実施とその成果の確保に資すること」を目的に行われている。故に、「学生が健康の自己管理ができるための援助<sup>1)</sup>」をする事が大学保健の目的である。しかし、自己管理のため、あるいは、健康に学生生活を過ごすための援助は、大学生でいる間だけの問題ではない。卒業後、社会人として生活していく上で、自分の健康を確実に維持・増進

していくために必要なバラエティに富んだスキルを獲得できるような援助をしていくこと、即ち、卒後までもを視野に入れた健康教育的な視点を大学保健に加えるべきであると考ええる。しかし、マンパワーや待遇などの面から、そのようなきめの細かさが必要となる援助は困難であるのが現状である<sup>2)</sup>。

そこで、業務の中でも、学校保健法によって義務づけられており、多額の予算を使う定期健康診断を、単なる健康管理のための情報収集の場とするのではなく、健康教育の場として活用していくことの可能性を考察したいと考えた。即ち、大学で行われる健康診断に着目し、保健婦が健康診断を健康教育の場として位置づけて活動をしている大学と、業者委託で健康診断を実施している大学とで、①学生が健康診断をどのように捉えているのか、

1)東洋英和女学院、2)聖徳大学、3)聖路加看護大学、  
4)東洋英和女学院大学、5)東京女子大学、6)早稲田大学、  
7)千葉大学、8)日本女子大学、9)青山学院女子短大

②その捉え方の背景は何か、を明らかにすることにより、健康教育的なアプローチである保健婦による保健面接の効果を検討することを目的として調査を行った。

## II. 方法

### 1) 調査対象

協力を得られた東京近郊にある4大学の文系に属する1年生を調査対象とした。1年生としたのは、各大学の健康診断への先入観によって健康診断の印象や実施方法に対する評価への偏りを少なくするためである。

各大学の概要と対象人数を以下に述べる。A大学は、文系女子大学で学生総数約2,700名のうち1年生629名。B大学は、総合大学で学生総数約42,000名のうち文系学部属する1年生1,000名。C大学は、文系大学で学生総数約1,200名のうち1年生282名。D大学は文系女子大学で、学生総数約4,200名のうち1年生555名。計2,466名を調査対象者とした。

### 2) 調査内容

調査票は、A4、1枚で、調査項目は、属性、健康診断の捉え方、健康診断を受けた感想、健康診断受診後の感想などについて選択式の自記式とし、無記名とした(表1)。

表1 調査項目

I.	健康診断をどう考えて受けたか
II-1.	健康診断を受けてどう思ったか
II-2.	どうしてそう思ったか
III-1.	健康診断を受けて、生活で役立てられると思ったことは何か
III-2.	その情報源はどれか
IV.	健康診断結果の通知が届けられたことwどう思ったか
V.	属性

### 3) 調査の方法

調査時期は、1997年4月から7月である。各大学とも健康診断の終了後に行った。

健康診断の検査項目については大学間に差はないが、実施方法が大学によって異なるため、調査票の配布方法に大学によって多少の差異がでた。A・B大学では、専任の保健婦に加え、臨時に保健婦を雇い、健診時に全ての受診学生に保健面接を実施し、異常の有無にかかわらず健診結果を返却している。A大学では、結果返却時に調査票を配布し、回収箱にて回収した。B大学は、健診結果の返却までの期間が長いことと、文系の学生に限定するために、健診期間中の文系学部1年生が受診する1日を調査日とし、保健面接終了時に調査票を配布し、回収箱にて回収した。C大学では、専任の看護婦が1名いるが、全て外部業者委託で健診を実施し、保健面接は行っていない。結果の通知は有所見者のみである。調査票は、健康診断終了後の授業時に配布、回収した。D大学では、健診結果が出た時点ですべての学生に結果を返却

するとともに専任の保健婦による保健面接を実施している。調査票は、保健面接終了時に保健婦より配布し、回収箱にて回収した。

各大学の1年生の当該年度健康診断受診率は、A大学98%、B大学61%、C大学98%、D大学97%であった。

各大学の回収数と回収率は、A大学533、84.7%、B大学408、40.8%、C大学244、86.5%、D大学365、65.8%。全体では、有効回答数1550、回収率は62.9%であった。

### 4) 分析の方法

調査協力を得られた大学側の調査実施上の都合から、大学によって調査対象者の性別にかなりの偏りがでたため、分析の一部は、A・D、B・Cの2大学間の比較を行った。

分析は、統計パッケージSPSS for Windows 7.0を用いて行った。独立性の検定には $\chi^2$ (カイ二乗)検定を用い、有意水準は $p < 0.001$ とした。

## III. 結果

調査対象者の属性は、男性625(40.3%)、女性925(59.7%)、最高21歳、最低18歳で、平均年齢は18.8歳であった。性別は、A大学、女子546名、B大学、女子2名、男子652名、C大学女子26名、男子219名、D大学女子367名であった。

### 1) 健康診断の捉え方

「あなたは今回の健康診断をどう考えて受けましたか。(以下、質問1)」という質問に対して、全体では「自分のために必要」67.5%、「決められたことなので仕方がない」17.2%、「考えたことがない」12.7%、「その他」2.3%、非回答0.3%だった(図1)。また、「今回の健康診断を受けてどう思いましたか(以下、質問2)」については「受けて良かった」73.2%、「何とも言えない」24.2%、「受けなくても良かった」2.5%、非回答0.1%だった(図2)。

質問1について、性差による偏りを除くために、その他と非回答をのぞいて、B・C大学の男子のみ、A・D大学とでそれぞれ検定を行った。保健面接を行っているA・D大学では差はみられなかったが、B・C大学間には有意な差がみられた(図3)。

質問2についても、「受けて良かった」群とそうでない群とで、同様に検定を行った。A・D大学では差はみられなかったが、B・C大学間には有意な差がみられた(図4)。

両質問とも、属性とは有意な差は見られなかった。

### 2) 健康診断の捉え方の背景

質問1と質問2の回答の関連を検討するため、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な関連がみられた。その分布を

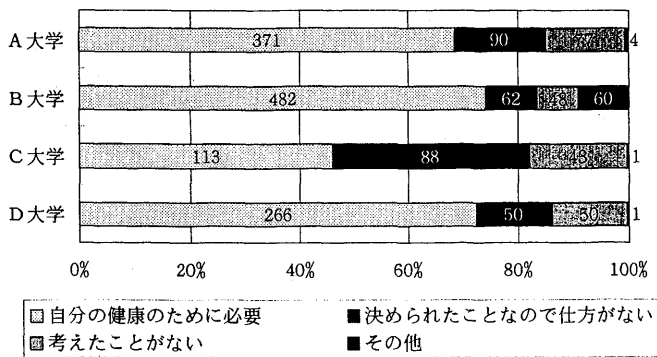


図1 健康診断の捉え方

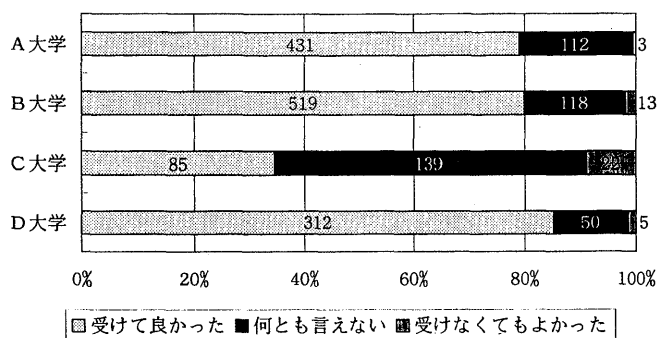


図2 健康診断の印象

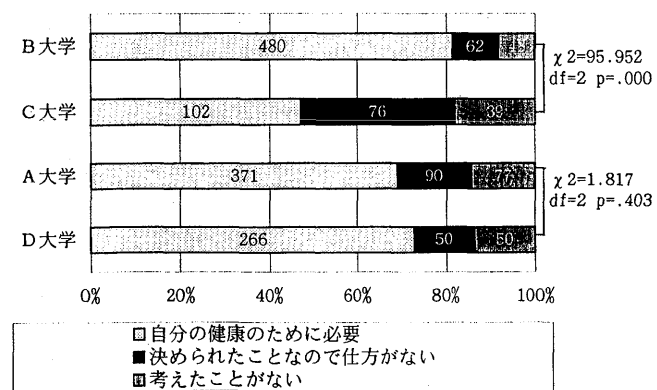


図3 健康診断の捉え方 大学間比較

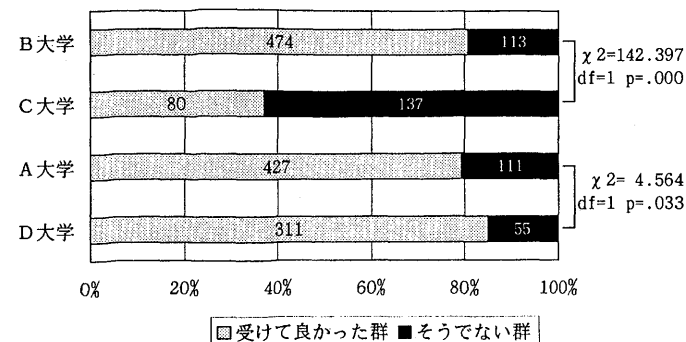


図4 健康診断の印象 大学間比較

みると健康診断を「自分の健康ため」ととらえていた者のうちの8割以上が健康診断を「受けて良かった」としていた。

質問2と付問①「どうしてそう思ったのですか」では、「受けて良かった」者のうち92%が「健康のチェックができた」、28%が「日常生活を見直す機会となった」、「相談することができた」22%だった。また、「何ともいえない」「受けなくても良かった」と答えた者は少数であるが、その理由として「検査を受けただけの感じがした」、「時間がかかりすぎた」を挙げた(表2)。

表2 健診の印象とその理由(複数回答)

	受けて良かった n=1135	何ともいえない n=375	受けなくても良かった n=38
健康状態のチェックができた	1045(92.1)	115(30.7)	1(2.6)
日常生活を見直す機会	318(28.0)	32(8.5)	1(2.6)
相談することができた	247(21.8)	23(6.1)	1(2.6)
健康診断書を発行してもらえ	198(17.4)	58(15.5)	1(2.6)
健康相談室の利用法がわかった	103(9.1)	16(4.3)	0(0.0)
時間がかかりすぎた	60(5.3)	108(28.8)	18(47.4)
不安になった	19(1.7)	20(5.3)	1(2.3)
検査をしただけの感じがした	15(1.3)	167(44.5)	23(60.5)
プライバシーが気になった	14(1.2)	28(7.5)	4(10.5)
不愉快な思いをした	4(0.4)	13(3.5)	3(7.9)
健康診断の必要がわからない	3(0.3)	8(2.1)	3(7.9)

また、質問2と付問②「健康診断を受けて、これからの生活の中で、役立てられると思ったことはどんなことでしたか」では、「受けて良かった」者のうち75%が「日常生活の過ごし方」を挙げていた。「受けなくても良かった」と答えた者では、68%が「役に立つことはなかった」としていた(表3)。さらに、「これからの生活で役立てられる」と答えた者のうち、A・B・D大学では保健面接が上位にあり、医師の診察よりも上位にあった(表4)。

表3 健診の印象と「健診を受けて役立てられると思ったこと」(複数回答)

	受けて良かった n=1135	何ともいえない n=375	受けなくても良かった n=38
日常生活の過ごし方	851(75.0)	204(54.4)	9(23.7)
体の問題の対処法	277(24.4)	65(17.3)	2(5.3)
心の問題の対処法	71(6.3)	17(4.5)	0(0.0)
性の問題の対処法	16(1.4)	10(2.7)	0(0.0)
役立つことはなかった	102(9.0)	105(28.0)	26(68.4)

表4 「これからの生活で役に立つと感じた情報源」の度数の順位

	A大学	B大学	C大学	D大学
測定や検査の結果	1	2	1	1
医師の診察	4	3	2	4
保健面接	2	1	-	2
パンフレットなど	5	4	3	5
健康診断結果の通知	3	5	4	3

調査の時点で、個々の健診結果に総合的な評価を加えた形で保健面接が行われていたA・D2大学においては、「各自に健康診断の結果のお知らせが届けられたことについてどう思いますか」の質問を加えた。その結果は、「必要である」と答えた学生が両校併せて、89%に上り、不必要と答えた学生はほとんどいなかった。

#### IV. 考察

質問1・2ともに、A・D大学間では差がみられなかったが、B・C大学間では、差がみられた。A・D大学

では、健康診断の実施方法などにあまり違いがない。B大学とC大学との違いは、周知方法や行事の位置づけ、実施方法によるものと考えられた。C大学ではカリキュラムの中に健康診断を位置づけており、半強制的に受けることになる。半強制的であることが「決められたことなので仕方ない」、というネガティブな捉え方につながることも考えられる。一方、A・B・D大学では、「自分のために必要」との回答が多かったが、その中で受診率の最も低いB大学で最も多かったことから、受診学生を対象にした本調査のデータは、健康診断を好意的に捉えている者に偏っていることが考えられる。

国立大学で行った調査によると学生の健康診断受診率は66.3%<sup>3)</sup>である。このことから、B大学は受診率が他の大学と比べて低い、国立並の受診率といえる。大学によっては、受診率向上のためにある種のペナルティを設けたり、半強制的に行う、など、様々な工夫をしているようであるが、強制的ではなく、受診率を上げていく工夫をしていくことが求められる。それは、C大学の学生が健康診断に対してあまり良い印象を持っていないことから裏付けられた。今後は、大学の偏差値や、学生の属性、高等学校までの保健教育の内容、健康診断の周知方法や実施方法などとの関連を検討していく必要があると考えている。

健康診断の実施の際に保健婦が健康診断に関わることができれば、周知方法や実施方法についての工夫ができると思われる。保健婦が保健面接を実施しているA・B・D大学と保健面接のないC大学とで、調査結果の分布に特徴的な差が出たが、保健面接は、健康診断の結果を自分の問題として捉えさせ、自分の健康に興味を持たせ、日常生活を見直させるなど、健康診断の結果をもとに個別の保健指導を行うことを目的としている。これは、身体的ケアと並び、看護の重要な側面でもある<sup>4)</sup>。一方で、疾病管理や保健婦による援助の必要性のスクリーニング、セルフケアのリソースとしての保健センターがあることをアピールする場でもある。「これからの生活で役立てられる」と思ったことの情報源の順位では、保健面接を実施している大学で「医師の診察」よりも「保健面接」が上位にきた。保健婦の保健面接が日常生活にアプローチしている裏付けであり、また、それを学生も好意的に捉えていると予測できる。「保健面接」が上位にきたA・B・D大学では、健康診断への印象の良い者がC大学と比べて多いことから、日常生活に即した保健面接を行うことによって健康診断を「受けて良かった」と思わせることに多少寄与していると考えてもいいのではないかと。大学生にあたる年代は他の年代と比べて有訴者率、通院者率ともに最低を示し<sup>5)</sup>、健康であることが当たり前であることから、彼ら自身も健康への関心は低いことがうかがわれ、健康診断の意義を見出していないことが予測される、一方で、自己同一性を確立することが発達課題である青年期<sup>6)</sup>において、自分で自分の生活をコントロ

ールし始めるに当たり、日常生活に対する関心が高いことも考えられる。

健康診断に良い印象を持っている学生たちが挙げた理由からは、受ける意義を見いだす健康診断像が浮かび上がる。即ち、健康のチェックがきちんとでき、検査だけでなく日常生活の見直しができ、時間がかかりすぎないものであることである。健診の実施主体が誰であろうとも、これらのことは健康診断実施上、留意していかなければならないことであろう。日常生活を見るためには、保健面接は不可欠であり、受診したすべての学生に実施することに意味があると思われる。本人が「健康のチェックがきちんとでき」るためには、健康診断の結果が本人に返されることが必要となる。役に立つ情報源では、結果を返却しているA・D大学で、「測定や検査の結果」が1位となっていることから、その必要性は高いと考えられる。所見の有無に関わらず、データを返却していくことは、お任せ医療からの脱却につながる医療消費者教育の側面も持つ。さらに、保健婦が健診結果に基づいた個別の保健指導を行うことが可能となり、より日常生活へのアプローチが容易になると考えられた。このことは、結果の返却に関して、A・D大学の9割近くの学生自身が「必要だ」と感じていることから裏付けられた。

健康診断は、健康教育の場としては定められていない。法律に基づいて学校側が一方的に健康診断を行っている場合には、学生にネガティブな印象を与える。健康診断を好意的に捉えることは、受診率を上げ、健康教育の機会を増やすことにつながる。成人病が生活習慣病と呼ばれるようになり、高齢化に伴い健康で意義深く長寿を生きるために若い頃からの生活習慣が注目される中、どのようなアプローチを行っていけばいいのか。そのアプローチの一つとなり得る健康診断は、多額の予算を使い、実施する義務のあるものである。健康診断の目的について、もう一度再考する時期なのではないか。少なくとも学生は、日常生活に根ざした健康診断を好意的に捉えていることが、今回の調査により示されたと考える。

## V. 本調査の限界と今後の展望

本調査の限界は、対象校に偏りがあること、調査対象者は健康診断の受診者であることから、健康診断に対してポジティブな見方をしている可能性があること、半強制的に受診させられている大学では、健康診断の印象がネガティブな方向に偏っている可能性があること、がある。今後は、これらの偏りをなくし、また、偏差値や所在地、校風などを考慮した調査研究をとおして、健康診断のあり方について考察を加えていきたいと考える。また、保健面接がどのような内容で、それを行う看護職にはどのような資質が必要なのかについても、今後の課題としたい。

## VI. まとめ

①7割弱の学生が自分の健康のために健康診断を受けると考えており、決められたことなので仕方なく、という、半強制的な感覚をもっている学生は2割に満たなかった。また、健康診断を受けことを7割以上の学生が良かったと答えており、好意的に捉えられていた。

②他の条件にも差異はあるものの、保健面接を行っている大学では行っていない大学より健康診断の印象が良かったことから、日常生活を視野に入れた保健婦による個別の保健面接が有効である可能性が示された。

## 引用文献

- 1) 上古久栄他、青年期の健康と看護 大学生の保健管理、17-20、日本看護協会出版会、1994.
- 2) 片平他、大学保健管理を業務とする看護職の実態調査、第32回全国大学保健管理研究集会報告書、1994.
- 3) 川崎晃一、国立大学の定期健康診断実施状況、学生の健康白書作成に関する特別委員会編、15-25、国立大学等保健管理施設協議会、1997.
- 4) H.L.ペプロウ、小林訳、人間関係の看護論、2-16医学書院、1989.
- 5) 国民衛生の動向 1997年、厚生統計協会、1997.
- 6) 滝沢三千代、伊藤・橋口・春日編、人間の発達と臨床心理学4、思春期・青年期の臨床心理学、23-38、駿河台出版社、1994.

## The practical use of periodical health check in colleges for promotion of health behavior

### — The effects of the health consultation by nurses —

Tomoko Sasaki, Keiko Katahira, Hisako Nakayama, Tomoko Obana,  
Noriko Kanda, Yoko Hayashida, Kumiko Kino, Kanako Takiguchi,  
Kimi Suzuki, Chizu Kamiyanagi, Kyoko Akaishizawa, Izumi Fukaya

The purpose of this study is to investigate the perception of the health consultations by nurses, which are held in the periodical health check-ups in colleges. To examine the perception, two points were studied: one is to know what college students think about the periodical health check-ups; the other is to investigate the background of those perceptions.

A survey was conducted among 2,466 freshmen in 4 colleges around Tokyo, with 1,550 (62.9%) student responses.

As 67.5% of students saw the periodical health check-ups as "for myself", 17.2% had negative feelings of "forced to get". Overall impressions following the health check-ups were "It's good to get" (73.2%) and "not good" (2.5%).

The good feelings for the health check-ups were attributed to the health consultation which being held individually by a public health nurses. The good feeling was held under the condition that it checked the health status, not only just to get examination but also to assess the daily life style, and did not require too much time. It was also suggested that the results of the health check-ups must be shared with the individual whether there were problems or not.

**Keywords:**

health education, school health nursing,  
health consultation, health check,  
health behavior